

現代日本社会の親密性における自己開示の条件に関する考察 — 広島県西部のトライアスロン競技愛好者の事例から —

浜田雄介

A case study of the requirements for self-disclosure in relation to intimacy within contemporary Japanese society — Triathletes in West Hiroshima prefecture —

Yusuke Hamada

Abstract

The purpose of this paper is to depict an example of modes of intimacy which exists in contemporary Japanese society in the specific case of relationships among triathletes. This study will particularly investigate how intimacy with others at their leisure exists to function as giving recognition to individuals.

I will argue that, as far as the background of the emergence of such intimacy is concerned, the fact that comprehensive relationships which used to embody criteria for people to acknowledge “What is *myself*?” have been dismantled. Because people have lost social cohesion in terms of self-other relationships, their scattered orientation has not been reconstituted. Moreover, it caused a dilemma in which people found it difficult to approach others who gave recognition to them. Therefore, it will be essential to overcome such a dilemma with others and to meet the conditions for self-disclosure in order to establish intimacy as mentioned above.

According to the present research, there are modes in which people acknowledge the differences between their own orientation and practice, within a relation of intimacy among subjects. People accept their mutual heterogeneity without identifying their own orientation and practice as those of others. By doing so, their own orientation and practice, and others who acknowledge them, will be synergistically meaningful. Among its subjects, the state of the acknowledgement of their differences was fixed as a condition for self-disclosure.

1. 本稿の目的

近代化の進行に付随して、旧来の伝統的、文化的な紐帯によって持続的に維持構築されてきた人々の関係性のあり方が変容しつつあるとされる。例えば地縁や血縁、社縁の堅固さが弱まったことや、不況による企業依存の生き方の揺らぎ（宮島・島藺，2003，p. 1）、核家族化や少子化、地

域社会の変容によって持続的に共有される時間や空間あるいはコミュニケーションメディアとしての文化が消失したこと（櫻村，2002，p. 221）などが、そうした変容の基因として挙げられる。ベック（Beck, U.）による「リスク社会」^{註1)}やバウマン（Bauman, Z.）のいう「個人化」^{註2)}の議論などは、上記のような変容を基底として、個人が日常生活

のあらゆる局面において選択の責を科される社会の不安定さを示唆している。

人々にとって、持続的な結びつきをもたらす時空間の喪失はこれまで「自分とは何か」ということの基準足りえてきた包括的な諸関係の解体を意味する(浅野, 1999, p. 52)。その一帰結として、人々のあいだで自己承認を希求する意識が先鋭化していること、また承認のあり方として「自分らしさ」がその基準となるような傾向が見受けられることが指摘されている。宮島と島藺は現代日本社会における個人々の「自分らしさ」を表象するものとしての「自律」への意識の高まりについて、以下のように例示している。

職場でも家庭でも従来の固定的役割構造が崩れ、決められた役割に安住できないため変化への適応の用意をもたなければと感じていること(自己再定義)、自分の言葉を持ち、自分の生き方をもたなければならないという思いが人々のなかで強まっていること(自立)、世間の標準や平均に囚われず、自分を貫くことで他人や社会と結ばれる道を探すという生き方もみとめられること(固有ライフスタイル志向)などの形で現れている(宮島・島藺, 2003, p. 15)。

また宮島と島藺は「自律」を実現する契機となるものとして、その支えとなる他者との「つながり」を挙示している(宮島・島藺, 2003, p. 16-7)。「つながり」における他者は、お互いの価値観の違いや異質性を前提にしたものであり、人々はそうした他者性に対して十分に意識的であることが求められると述べられている(宮島・島藺, 2003, p. 22)。

本稿の目的は、トライアスロン競技愛好者^{註3)}を対象として、上述のような「つながり」における親密性の動態の一端を描写することにある。「自分らしさ」を希求する個人と、個々に承認をもたらす他者との「つながり」が、現代日本社会に顕現しているという宮島と島藺の指摘に関して、余暇時間での趣味的実践を介した親密性の事例をもとに、いかにして自己開示とそれによる他者からの承認の獲得がなされるのかということの

条件に照射していく。

自己開示とは、自己に関するメッセージを発信し、それを他者に肯定、受容してもらうことによって、他者に対する信頼を得る営為とされる(福重, 2006, p. 135)。宮内は、人々の繋がり^{註4)}がうまくいかない要因として、多様な価値基準が介在する現代社会のなかで、人々が自己開示できず、他者を欺いているかのように感じていることを挙げている(宮内, 2005, p. 312-3)。また、人々が自己開示をできない事由として、自らの苦しみや悩みを表に出すことのできる環境のなさがあるという(宮内, 2005, p. 333)。多かれ少なかれ何らかの悩みを持つ大半の人たち(宮内, 2005, p. 333)にとって、個々に固有の問題を表出できる環境への参与やその構築が、自己開示にとって有意な役割を果たすということになる。したがって本稿ではトライアスロン競技愛好者同士を事例として、趣味的実践にもとづいた親密性が、いかような条件のもとに、自己開示が可能な環境として機能するのかということの様態を顕示したい。

2. 親密圏における他者とのジレンマ

(1) 現代的な親密圏の特性

先に、個々に承認をもたらすものとしての他者が相互の異質性を前提とすること、また互いに異なる価値基準が人々の自己開示にとって障壁となるということに触れた。このことは、人々を結びつける社会的な紐帯や共通した目的が衰退した現代において多様で異質な他者との距離を平易に縮めることはできず、他者による承認への欲求が即時的に充足されない状況を示している。

齋藤は、現代的な親密圏を「具体的な他者の生への配慮/関心をメディアとするある程度持続的な関係性」と定義している(齋藤, 2003, p. vi)。これまで、親密圏とは異性愛にもとづいた「愛の共同体」としての家族と同一視されてきた(齋藤, 2000, p. 93)。しかし、同性愛や単身者などを例とした家族の多元化や、家庭内暴力や虐待に代表される家族の分断(齋藤, 2000, p. 93-5)など、必ずしも親密圏と家族とが等号で結びうるとは限らないこと、また、例えばグループホームやセルフヘルプグループなど、近年にみられる家族の枠を超えた新しい親密圏の形成(齋藤, 2003, p. v)がな

されていることが、上記の定義の背景となっている。

具体的な他者とは人称性を帯びた他者のことであり(齋藤, 2000, p. 93)、そうした他者との関係性は「他ならぬ」という代替不可能性を包含するという(齋藤, 2003, p. vii)。また親密圏における他者は身体性を備えており(齋藤, 2000, p. 92-3)、そうした他者との関係が持続的であるということは、他者からの愛着や被縛性の介在を意味している(齋藤, 2003, p. vii-viii)。加えて親密圏では複数の人々との行為や会話による「レスポンスレリテイ」に自らを置くことができる。そのため、親密圏内にいる人々に一定の安全性を与え、生の拠りどころになると同時に、他者との差異によるジレンマが介在している(齋藤, 2003, p. 321)。

土井は若者同士の親密性を例に、自己肯定感に対する社会的な安定性が失われたことの代替としての具体的な他者によって、自己の正当性の確証を得ることが求められると述べている(土井, 2005, p. 48)。先述のような社会的状況から、「自分らしさ」の指針はもはや客観的にみえる他者からの肯定的な評価によって支えてもらわなくなってしまうとされる(土井, 2005, p. 45)。しかし社会的な根拠に支えられない内発的な「自分らしさ」は、各自の関心を差異化してしまう。多様な個々人同士の関係を安定させる強固な紐帯もまた存在せず、他者からの承認を求め、関係を維持することが困難になってきている(土井, 2005, p. 46-7)。

齋藤のいう異質な他者とのジレンマはこの指摘に符合するものと考えられる。芳賀は現代における他者との距離をめぐるジレンマについて、他者との距離を縮めることで承認の獲得はなされたとしても、同時に自己の感覚や感情にもとづいて自分らしく暮らすうえでの限定を課されるパラドックス的状况に陥ると述べている(芳賀, 1999, p. 28)。したがって宮島と島藺のいう異質な他者との「つながり」という前提からは、他者との持続的な関係性の維持と、そこにおける葛藤という様相が導出される。そしてこうした葛藤を緩和、超克することが、自己開示に付帯する条件として定置されよう。

(2) 選択的コミットメント

浅野は現代に特徴的な新しい親密性の形である「選択的コミットメント」という概念を「参入・離脱の比較的容易な関係において、生活の文脈を限定的・選択的にのみ共有するような親密性」と定義している。インターネット上で互いの顔さえ知らぬままに結ばれる親密な関係、自己開発セミナーやその他のワークショップでしか会わない人々との間で結ばれる親密な関係などがその例とされる(浅野, 1999, p. 50)。

浅野によると、これまで親密な関係が取り結ばれるのは、家族など生活上の広範な文脈を共有した包括的な領域に限られていた(浅野, 1999, p. 49)。これに対して選択的コミットメントでは、その特性として特定の文脈においてのみ関係が構築されること、関係への参入離脱の自由性、関係構築の過程を享受する即時充足性が挙げられている(浅野, 1999, p. 50-1)。

「選択的コミットメント」による親密性の要点は、特定の文脈を基底とした関係性の維持構築と、その場における自己開示の可能性という点で特徴づけられる。「選択的コミットメント」の場においては、自分の全てを見せなくてもよく(浅野, 1999, p. 50)、いくつもの中心へと散開したその都度の「自分らしさ」(浅野, 1999, p. 51)が充足される。特定の問題や関心にもとづいた他者との親密性は、ある文脈に沿った自己開示の可能性とともに、必要以上に他者との距離を縮めない作用を兼有していると考えられる。

(3) 関係における持続性

浅野の指摘にしたがえば、「選択的コミットメント」による親密性では人々の結びつきの基底が共通の問題や関心によって整序されていることで、承認欲求と他者の異質性との相克が回避されるということになる。樫村は安定した他者関係の構築あるいは個人が関係にコミットするためには、互いに対称で(樫村, 2002, p. 224)、持続的な出会いの継続と記憶の蓄積を要すると述べている(樫村, 2002, p. 226)。一定の継続した経験の共有が担保されることが、成員性などといった関係上の明証性を有さない関係性を維持する要件となる(樫村, 2002, p. 225-6)。

また花崎によると、親密圏を新たに創りだし、またそれを安定的に維持するためには、互いに相手が自分の私的な領域に入ることを許しながらも、相手がいやなことは強いて求めない距離を保つこと、価値感情の類似性や共通性を親密さの担保としながらも、過度に相手に同調を求めないことが肝要とされる（花崎, 2003, p. 24-5）。

これらの指摘から、特定の文脈が即時的に安定した他者関係をもたらすのではなく、それを契機とした他者との適正な距離にもとづく持続性および相互の対称性を築く過程が伴うことが考えられる。したがって、本稿では対象者個々の志向と、彼ら／彼女ら同士の他者関係のあり方との連関から、対象者同士が持続的に結びつけられる事由に焦点をあてる。対象者が競技という文脈とその実践を通じた持続的な他者関係にコミットしていく過程を追うことで、自己開示を可能とする環境の条件の精査を試みる。

3. 方法と対象

(1) 調査方法

本稿が調査対象とするのは、広島県西部におけるトライアスロン競技の愛好者たちである。彼ら／彼女らの年齢や性別、職業は様々であるが、競技活動を通じた交歓によって関係が結び結ばれているという点で、特定の文脈にもとづいた関係性への参与およびその構築として捉えられる。

調査方法は対象となる実践の場への参与観察と特定の対象者に対する聞き取り調査である^{註5)}。調査実施期間は2005年11月からの約1年間である。参与観察の場としては、自転車店主催の合同練習会や対象者が集まった週末の練習への参加、または大会や遠方への練習合宿への同行などを挙げるができる。

聞き取り調査では、愛好者6人を対象に1対1での半構造化インタビューを実施した。対象者は各々日常的に多くの時間や労力をトライアスロンに関係する活動に割いている。時期などによる違いはあるが、大会に向けて準備する場合などでは1週間の練習時間が14時間を超えることもあるという。また重きをなした活動ということについては、大会参加経費や機材にかかる費用など、経済的な面からもいうことができよう。こうしたこ

とから、トライアスロンが競技愛好者の日々の生活において比重の大きな実践であることが推察される。またトライアスロンは個人に依拠する持久的な競技である。しかしながら、そうした実践において他者との関係が求められ、実際に形成されていることは、上述した親密圏の特性を包含しているものと考えられる。

聞き取り調査対象者の選定事由として、参与観察を継続していくなかで、彼ら／彼女らが互いを活動上の重要な他者を指す場合に用いる言葉である「仲間」や「いつものメンバー」として認識していると考えられたことが挙げられる。実際に彼ら／彼女らは活動の場において帯同する機会を多く有しており、またこれまで持続的に活動をともししてきた経験の蓄積などが確認された。対象者の年齢は20代後半から40代前半まで、男女比は4:2である。職業は自営業、会社員、公務員などとなっている。6名個々の詳細は以下のとおりである。また文中の年数は調査当時のものとする。

(2) 聞き取り調査対象者の詳細

Aさん(20代後半、男性)は機器部品メーカーで設計事務に従事している。高校まで陸上部に所属しており、高校卒業後、現在勤務している会社でも陸上部に入部した。しかし実業団のレベルの高さに壁を感じ、また同期社員との交友などに時間を割いていくうちに陸上から離れ、半年で退部してしまった。その後しばらくは運動から離れていたが、もともと興味があったトライアスロンを始めようと一念発起し、約2年前に競技用自転車を購入した。始めた当初は思うように動かない身体や一時的に参加したトライアスロンクラブの厳しい指導に当惑したというが、半年ほど前にふと立ち寄ったX自転車店を介して現在活動をともしする人々に出会い、継続して練習をこなせる環境が整ったという。平時の退社が22時近いこともあり、仕事が忙しいなかで自分がどれだけできるかということを目指して練習に取り組んでいる。

Bさん(20代後半、女性)は実家の生花業に従事して8年目になる。両親と姉と4人で店舗を切り盛りし、将来は経営者として家業を継いでいくつもりだという。仕事が終わってすぐに帰宅という生活から脱却を図るため、およそ6年前にY

スポーツクラブに入会した。初めはエアロビクスのレッスンに参加するなどの活動が中心であったが、プールを利用しているうち、徐々にトライアスロンに取り組む人々と面識を持つようになった。彼らに連れ添って県内の大会に応援に出かけたりもしたが、そのときはまさか自分が競技者として大会に出場するとは思ってもよらなかったと回想している。ところが県内でも著名なトライアスロン競技者夫妻(HさんとIさんとする)との出会いをきっかけに、真剣に競技に打ち込むようになった。現在では国内でも有数の長距離大会である鳥取県の皆生大会を2年連続で完走するほどの実力の持ち主である。

Cさん(40代前半、男性)は公務員として行政機関の警備にあたっている。勤務は24時間拘束と休曜日とを繰り返すサイクルによる交代制で、自転車競技には最適の勤務体系とのことである。小学生のときから野球一筋で、現在の勤務先も野球を継続できることを基準に選んだという。軟式野球の社会人日本一や国体出場など、輝かしい実績を残している。5年ほど前からトレーニングの一環として自転車に興味を抱くようになった。その後X自転車店の仲介でDさんと知り合って以来、自転車競技にのめり込み、Dさんのことを「師匠」として崇敬している。それまで所属してきた機関内の野球部を引退し、現在は休曜日のほとんどを自転車競技の練習にあてている。また勤務日でも休憩時間などを利用してランニングを実施するなど、豊富なトレーニング量を確保している。

Dさん(30代前半、男性)は対象者のなかでも異彩を放つ存在である。高校生のころからマウンテンバイク競技で頭角を現し、就職後も自転車メーカーの契約選手として全国を転戦し、全日本選手権で優勝するなど活躍した。ところが仕事が繁忙になったことを契機に一線から退き、趣味として長らく興味を抱いていたトライアスロンに転向した。競技転向後も県の強化指定選手となるなど実力者として名を馳せたが、仕事が多忙を極めたことから競技との両立が困難になり、思い悩む日々が続いたという。転職した現在は産業機械を販売する営業職に勤める傍ら、自転車競技を中心に活動している。現在でもその実力は仲間内でも

頭抜けており、周囲の競技者の目標の1つとなっている。

Eさん(30代前半、女性)は、およそ10年前に販売業の事務員から公的機関の団体職員に転職し、勤務体系が規則的になったことが、運動を始める要因となった。Yスポーツクラブの会員となり、マラソン大会などに出場していたが、トライアスロンは「自分にはできないもの」として敬遠していた。しかしたびたび周囲から大会参加の誘いを受け、4年前から本格的に競技に取り組むようになった。苦手であった水泳を克服し、大会を完走できたこと背景には、練習に付き添ってくれた周囲の存在が大きかったという。大会に参加するときは必ず複数人で遠征し、折々の交流を楽しみながら競技を継続している。

Fさん(30代後半、男性)は大学卒業後に東京で就職し、その後広島での企業勤務を経て、現在は家業であるガラス施工業を継いでいる。就職後間もなくして太りだしたことが、Fさんが運動を始める契機となった。トライアスロンを知ったのは広島に戻ってからで、初出場した大会での感動が、今まで競技を継続してきたことに通じているという。毎年皆生大会に出場することを目標に練習を重ねたが、業務中の怪我などもあり、一時的に競技を離れたこともあった。それでもトライアスロンをやめようとは考えず、その折々で、できる範囲を考えながら練習に勤しんできた。現在は長崎県で開催されるアイアンマン^{註6)}出場を目標に邁進している。

(3) 代表的な実践の場のあり方

X自転車店は山口県との県境に程近い場所に位置しており、場所柄から米軍基地よりの来客も多い。そのため基地内で行われるトライアスロンやマラソンの大会に店長や客がボランティアスタッフとして運営にかかわることもある。お店は大正元年から続いており、3代目となる店長(50代後半、男性)は、その親切な人柄を示す声を多く耳にしたことや、県内外を問わず常時多くの客が入りしていることなどから、客からも慕われる存在であるといえる。なお、聞き取り調査対象者の全員が、X自転車店の顧客である。

店長は現在の店舗のあり方を、「自転車を介し

て誰しものが交流できる場」にできるよう心がけているという。過去にX自転車店には固有の名称を冠した愛好者のチームが存在していたが、活動上の志向の相違などから成員間で軋轢が生じチームは立ち行かなくなった。そのような経緯を踏まえ、お店や練習会で様々な人が場を共有し楽しむことができるようにとの思いがあるという。

X自転車店では「しまなみファンライド」と呼ばれる自転車の走行会を、年に2から3回の頻度で主催している。本州と四国とをつなぐ「しまなみ海道」を往復するおよそ84kmの行程は、その景観や道路状況のよさなどから好評を博し、毎回50人ほどの参加者で賑わっている。走行会の参加者は共通した成員要素を有しているというわけではなく、全員が顔見知りというわけでもない。走力もさることながら、X自転車店との関わりの深浅や所属も様々であり、他店の顧客や異なるチームのメンバーなどが一同に介する形式となっている。

このような走行会の特徴から、参加者の内訳は流動的である。「周囲は知らない人ばかり」という参加者の言葉からも、そうした特徴の一部を垣間見ることができる。またそれぞれが行事の参加について異なる目的や志向を把持していることも同様に類推される。

一方Yスポーツクラブは、広島市の西方に位置する大型ショッピングセンター内に施設を構えている。広島県西部では随一の規模であり、多くの競技愛好者が利用している。聞き取り調査を行った6人のうち、Aさんを除く5人がこのスポーツクラブの会員である。

かつてYスポーツクラブ内でもトライアスロンのチームが結成されており、現在も名前を替えてチームは存続している。しかしながら、現状では実質的なチームとしての活動は行なわれておらず、会費だけが徴収されているような状況だという。もともと結成されたチームが概して競技志向であったのに対して、初心者や週末のサイクリングを楽しみたい人たちなど、幅広い層に門戸を開くという趣旨のもと、チームは改名し、再結成された。ところが代表者の多忙などもあり、次第にメンバーが定期的集まらなくなってしまい、現在に至っているとのことである。

Bさんは現在Yスポーツクラブで親交のある競技愛好者とのかわりについて、下記のように考えている。

別にジムが一緒じゃけえって、休みの日とかに待ち合わせて練習とかはあんまりない。やっぱりグループというか、一見一緒っぽくて実は違うみたい。けっこう一緒におりそうでおらん。

同様に、Yスポーツクラブに入会して間もないCさんは以下のように話す。

なるべく今は新しく知り合い作りとうないんよ。(中略)知り合いできてそこで話したら練習のジャマになるじゃん。ワシは鍛えに行きよるんじゃけえ話に行きよるんじゃないけえ、そんな知り合いは必要ない。今までおる知り合いは仲間じゃけえそういうのは別で楽しいけど、話しょっても。でも今から先には作らない。

上記のような事柄に関して、対象となる愛好者のあいだには人々を束ねる明確な枠組や関係性における外的な参照点は存在していない。彼ら/彼女らのあいだで明示的な共通の目標などもなく、競技に対する志向や競技力、実践をともにする頻度なども疎らである。彼ら/彼女らが実践をともにするのは互いの都合があったときに限られ、それは一見して独自の志向に沿って活動している者同士の烏合のようにも受け止められる。

しかしCさんのいう「仲間」とはそのような関係性を指す表現ではなく、互いの存在を「意味ある他者」^{註7)}として認識していることの表れであろう。このことから、先述した特定の文脈を介した親密性が、必ずしも文脈ただそれのみを通じて構築されるものではないということが推察される。それは競技という共通項によるチーム活動の衰退や、BさんとCさんが安易に他者との共在や関係の取り結びを望んでいないことなどからも看取される。

このことから特定の文脈のみでは多様な志向を収斂し、他者に自己開示を促す十分条件とはならないこと、言い換えれば、自己開示の障壁として

の他者とのジレンマを超克する条件が、「仲間」といわれる対象者同士の親密性において介在しているということになる。

4. 聞き取り調査対象者同士の親密性

ここでは、おもに聞き取り調査から得られた結果をもとに、いかにして対象者同士が「仲間」として互いに結びつけられているのかということの昭示を試みたい。以下よりいくつかの項目にわけて、彼ら／彼女らの言説について検討していく。

(1) 承認されないという経験

聞き取り調査対象者のなかで、4名がこれまでYスポーツクラブのチームや、県下のほかのチームとかかわった経験を有している。しかし現在では4名ともに特定の枠組みにもとづいたチームの活動には参与していない。

かつてYスポーツクラブのトライアスロンチームに所属していたFさんは、周囲との志向の相違から脱会し、しばらく単独での活動を続けていた。そのときのことをFさんは以下のように振り返る。

思いが伝わらんことが多かったけえ、(中略)チームの総会とかしたりするんじゃけど、いくら意見を述べても最終的にはある人がおって、その人のいうことが全てになっとるん。じゃあ意見言うた意味ないじゃん。

(練習会が)9時出発なら9時出発で出れるようにみんなおるんじゃけえ、そうすればええじゃん。そういうことができんわけなんよ。ルーズなんよ。そういうことがワシイヤなん。自分で9時にスタートできるように頑張って仕度して、それなりに時間かかる人は自分が早く行って自ずと仕度すりゃええわけじゃん。いつもそういうふうな内容のことを言うんじゃけど伝わらんのんよ。

競技を始めた当初、あるチームの練習会を紹介されたAさんは、当時のことをこう振り返る。

イチから教えてくれるっていう話で行った

んよね。そしたら全然教えるも何も。自転車買った次の日じゃけえ、集合場所だけ教えてもらって自分で車で行って。

そのときに(チームの)会長の方に言われたのが、水泳やったことがなかったけえ「泳げるようになってから来い」って言われた。「泳げんヤツがトライアスロンはできん」とハッキリ言われて。結局そうだったんよ、自分で練習してから来いって。ハッキリいわれたから、次の練習も周りの人からは誘ってもらえるけど、会長がそうやって言われるからには行きづらいよね。

Eさんは現在も名義上はYスポーツクラブのチームに所属している。しかし現在は主だった活動はなされていないという。

(過去には)第3日曜日だったか、みんなで公園走りましようとか、あったんじゃけど、やっぱり揃わんくなって、私は引っ張られるほうじゃけえそういうのあったら「ハイ」って行くんじゃけど。やっぱり人数が揃わんとか、せつかく声かけとるのにとか、揃わんかったらガックリきて、やっぱり「チェッ」ってなるよね、「チェッ」って。

生花業を営むBさんはこれまで特定のチームに所属したことはなく、これからも決してそうしたいとは思わないという。

大変そうじゃん(チームに)入ったら。何かすごい思うんじゃけどね、もともと気が合って仲良くなるんだったらすごいずっと一緒におっても楽しいと思うんじゃけど、趣味で一、趣味が一緒じゃけえって全部が全部みんなと気が合うわけじゃないじゃん。絶対合わん人もおるけえ。そういうのはすごいめんどくさいんよね。じゃけえ(気を)使わんといけんのじゃろうけど、いらん気じゃないけど人間関係が面倒くさいけえ。合う人とは仲良くするけど、合わん人とは表面だけでいいけえ、チームとか入ったらまためんどくさそうじゃ

ん。みんなで一緒に行こうとか。結構身近にもあるけえ、そういうの。仲よさそうで実は上辺だけの付き合いとか。そんなんよりは、(チームに)入らずに、そのときに目標が一緒の人と練習したほうがいいじゃん。

上記のような経験や考えから、彼ら/彼女らは現在では固有のチームとかかわる活動の機会を有していない。Fさんは過去に所属していたチームの緩慢な雰囲気、またAさんは初心者にとって排他的ともいえる扱いに抵抗を感じたことが、チームから距離を置くきっかけとなった。これらはともに自己の志向するあり方が承認、受容されない経験として定置される。またEさんが語るようなチームの機能していない現状は、そこでの実践が他者からの承認を担保するものではないことを示唆している。

チームに所属したことのないBさんのいう「面倒くささ」は、「趣味」という共通項が、各々に散開した志向を統合するものではないことを示唆している。実際にこのことを身近に感じてきたBさんにとって、チームは余計な心的負担を強いる媒体でしかない。選択的な親密性において自己開示できるかどうかは、文脈によってのみでは決まらないことが上記の例より示される。これらのことから、特定の文脈そのものにとづいた外的な諸制度や共通項による枠組で人と人をつなぎとめることは、彼ら/彼女らにとって自己開示の十分条件として成り立たないと考えられる。

(2) 意味ある他者による承認

競技を始めること、あるいは継続して練習することに関して、彼ら/彼女らから聞かれた言葉に「1人ではできなかった」というものがある。ここではこの言葉を端緒に、競技という実践における他者が、彼ら/彼女らにとって承認をもたらす媒体として機能する様態を示していく。

競技に関しては常に教わる立場にあると自称するEさんは、皆生大会に出場することを決意し、練習に取り組んだときのことを楽しそうに振り返る。

(一緒に練習してくれた人が)申し込むとき

も「だいじょぶ、だいじょぶ」って(笑い)。乗せられて(笑い)。「すごいねえ」って。乗る私はどうなん?って感じ。何も疑うことなく乗ってしまった。

(自転車の練習中に遅れても)ビーって待つて止まってくれとったり、ビーって帰ってきってくれとったり、(一緒に練習してくれた人が)「(先に)行きよるけえねえ」みたいな、(自分も)「行きまーす」みたいな(笑い)。そんな感じですごい嬉しかったし、泳ぎ方も「ココに気持ちをもってくんよ」と浮く要領を教えてもらったり、かき方とか軸とか教えてもらったりして、何か「やらねば」って感じになるね。

Eさんは大会への出場や競技に取り組むにあたって「周りの存在が大きい」という。ここでいう「周り」とは、Eさんが競技に取り組むうえで牽引してくれる他者として解釈できる。このような他者の存在をEさんは「パワフルな人」と表現する。Eさんは1人で大会に遠征したりはせず、「パワフルな人」による誘いをもとに、大会への参加を決めるといふ。こうした姿勢について、Eさんは以下のように話す。

(自転車に乗っている姿について周囲が)かっこいいよー、スタイルかっこいいよーって(笑い)。「えっ?えっ?」って私も嬉しくて、嬉しいとたぶん馬力も出るんかもしれん。

「前に誰かがおる」とか、追っかける気持ちで私まえに進みよるんだと思うんよー。誰もおらんかったら、たぶんね、バックしよるかもしれん(笑い)。(大会でも)「前の人追っかけるぞー」って感じで。なんかちょっと稀なスタイルかもしれん(笑い)。

上記のことから、「人についていく」ことがEさんの競技に対する積極性に寄与していることがわかる。Eさんは「1人では今まで絶対頑張っこれなかった」といふ。このような自覚のもとでの「パワフルな人」は、Eさんの実践を補完する

かけがえのない存在であり、またそのあり方の承認に適う媒体となっていると考えられる。

彼ら／彼女らが競技に取り組むうえで、導となる他者の存在が大きいという例はほかにもある。Fさんは、競技を始めた当初、競技に対する周囲との志向の相違から、1人で競技を続けていた時期があった。しかし、Dさんたちとの出会いがFさんのそうした状況に変化をもたらしたという。

(Dさんともう1人の実力者であるHさんとに出会ったことが)大きいねえ。練習方法が自己流じゃったけえ、どういう練習したらええんかというのが全然わからなかったけえ。あれらあが入ってきたんが大きいよね。Dくんは何年前じゃろうか、4、5年前にみっちり1年間一緒に練習してもらったことがあるんよ、日曜だけじゃけど。日曜の、1年間で8割方は自転車Dくんと乗ったかのう。で、一緒に乗ることで、一緒に食事をしたりとか同行することが増えてくるんよ、遊びとかでもね。そうすると練習以外でも彼と話していると、ためになることがあるんよ。

たぶん彼らが出てこんかったら…、やめとるかのう。やめとるかだらけとるか。確かにその後でも練習できとる年、できない年、その前も練習できとる、できてない年、やっぱり仕事もあるし、つてのがあったけど、今も大して練習してないけど、やっぱりやめたいという気持ちはないし、やりたいという気持ちが常にあるけえねえ。やっぱり彼らがおってくれたせいというのはかなり大きい。

Dさんに練習に誘われた当初、Fさんは「いやいやDくん、僕はキミとは自転車には乗れんよ一、恐れ多くて。ようついていかんけえ」と断ろうとしたという。しかしDさんが「サイクリングがてらに」と自分を引っ張ってくれたことから、ともに練習する機会を多く得ることとなり、現在まで競技を続けるうえで、またそれ以上の意味を持つ「仲間」となっている。Fさんにとって自分のあり方を認め、指針となってくれる他者の存在が、かけがえのないものになっていることがわか

る。

Fさんにとって、Dさんらとの出会いは、競技に関する指標であり、また自身の志向に適う「仲間」との出会いであった。また同様にCさんも、Dさんとの出会いで受けた衝撃を以下のように振り返っている。

心拍計の使い方が全然わからなかった。説明書読まん人じゃけえワシは。そしたらXさん(自転車店の店長)が師匠、今のD師匠が近いけえ、教えてくれるけえって言ったらわざわざ(職場の)正門来てくれてわざわざ、忙しいときに。まだ前の職場のときかな。そのときに教えに来てくれて。そんでいろいろ話しょって、体重減らさんとロード乗ってもキツイけえって言ったら、「こういうトレーニングしたらいいですよ、3ヶ月から遅い人でも半年もかからんうちに減ってきますから」って。騙されたつもりでやってみようか一ってってやったらみるみる減ってきて「うわあ、すげえわあ」って。気がついたら痩せとったみたいないう感じじゃね。あれからじゃね、それから勝手に「師匠」って呼びだした。

CさんはDさんとの出会いを機に、本格的な練習に取り組むための身体的基礎を養うことができた。次第に練習を積み、やがてDさんと練習をともにするようにまでなったが、そこでのDさんの走りにまたも驚かされたという。加えてそうした合同の練習を重ねるうちに、現在練習をともにするほかの愛好者とも知り合うことができたことも大きいとCさんは語る。

FさんとCさんは目標となり信頼できる他者との出会い、練習における濃密な時間の共有を経てきた。このような過程で、現在の「仲間」と出会い、自らの活動の指針を得たといえる。

FさんやCさんの言説に呼応するように、Dさんも以下のように話す。

やっぱり今はCさんとか、みんな自転車一生懸命やりよってじゃけえ、「師匠、師匠」ってやってくれるけえ、そのへんでボクも中

途半端なことはあんまりしとないし。やっぱりできればね、強いところも見せてあげたいしね、そしたらみんなの気持ちも高まるしねえ。

割と自己流でやってきとるけえ、自己流は自己流でいろいろ苦労するじゃん。そうすると割と説得力があるんかしらんけど、自分が経験してきたことを話したりするのを割とみんな真剣に聞いてくれるよね。やっぱ悩んだったらね、それはワシがずっとやってきたことじゃけど、少しでも参考になるならね。Cさんはそんな感じで師匠と弟子の関係になってしまった(笑い)。ボクもCさんみたいな人がおるけえ頑張れるしね。やっぱ負けたくないしね。おらんかったらそういう気持ちになれんしね。

こうした言説が示すように、Dさんもまた周囲の愛好者を意味ある他者として捉えている。周りを引っ張り教える立場としての自覚とともに、Dさんの実践のあり方を肯定するものとして、他者の存在が大きな意義を有していることが類推される。

最後に、Bさんが競技に没頭する契機にかかわる言説を紹介する。Bさんは皆生大会出場に向けて、同じ目標を持つ他者の存在をかけがえのないものとして位置づけている。

Iさん(実力者であるHさんの妻)も一緒ぐらいに(競技を)始めて、フルマラソンも一緒のときに出てっていうのがあったけえね、何か一緒に練習する人がおったけえそれはすごいよかったよね。Iさんのほうがバイクとかも速いけど全然、じゃけど一緒に練習できる人がおったけえっていうのがある。じゃけえ今年はダメだったんよ。一緒に練習できる人がおらんかったけえ。(引っ越されてしまったので)いいパートナーがおらんくなっただけえねえ。

毎週日曜日一緒に(練習)しとった、っていうか強制(笑い)?(Hさんから)「今週の日曜日うちに来い、一緒に行け」みたいな。ホン

マによ練習しよった、1年目は。一緒にねえ行く人がおったけえ。Iさんも頑張るとるけえうちもがんばらにゃいけんみたいな。向こう(Iさん)もそうだったっていつてくれたけえね。

県下でも有数の実力者であったHさん夫妻との出会いは、Bさんにとって競技に本格的に取り組む最大の契機となった。そのなかでも、Iさんの練習は、皆生大会という大きな目標を共有し合う場であった。大会で不本意な成績に終わったことの要因に、Iさんとの練習の場を失ったことがあるとBさんは考えている。彼女にとって実践をとにもする他者の存在が大きな意義を有していることがわかる。

ここまで挙げてきた例のいずれもが、競技活動に取り組むうえで他者が各々の志向や実践のあり方を肯定する契機となり、その存在を意義深いものと考えている。このことから「承認をもたらすものとしての他者」という機能が、彼ら/彼女らの関係性において介在しているといえるだろう。

(3) 異質性の受容と他者への関心

続いて彼ら/彼女ら同士の親密性の特徴にまつわる言説を提示する。彼ら/彼女らのあいだでどのような関係のあり方が求められ、実際に構築されているのかを概観する。

チームの排他的な雰囲気と違和感を覚えたAさんは、周囲の愛好者との現在について以下のように語っている。

(みんなで決まって集まるなど)そこまでのあれ(強制)はないね。そこまでだったら苦しいかもしれんね。どうしても時間が限られとるなかで、になってくるけえ。やっぱり自由があったほうがいいね。(チームは)今から考えれば抵抗があるかもね。そっち(現在)のほうがいいと思う。(中略)今のメンバーで強制になることは考えにくいと思うね。

X自転車店からの紹介で、CさんやDさんたちと集まって練習する機会を得たAさんは、現在の練習環境に対する印象を「自由がある」とい

う言葉で表している。この「自由」とは、強制的な参加が求められること、また各人の多様な取り組み方を受容することへの共通認識を指しているといえよう。Aさんは合同練習に参加しない日でも、代替となる練習の機会を自主的に設けている。このことから「不参加」が安易な欠席ではなく、自己の取り組み方を貫く姿勢として扱われる。

Eさんは、自らの周囲にいる愛好者を「自分を引っ張ってくれた人たち」として位置づけている。そうした人たちについて、Eさんは次のように語る。

みんな十人十色でいろいろ違うじゃん。じゃけんそれを押し切ってまで「こっちゃー」みたいな、「ついておいでー」みたいなのはようせんていうか、なんか違う方向行っとったらどうしようとか思うし、そういうのはないかな。(今の周囲にいる人たちとは)ああ、気楽ー。とてもお気楽で、何でも話せるし、たぶん何でも言ってもらえとると思うし、何か楽、楽である。

Fさんも過去のチームと比較して、現在交流のある愛好者について下記のように述べている。

みんな気が合う。楽。言いやすいとか、行きたくないわけじゃなくて行かれないと思うじゃん。(練習できてないと)ついていけんし。練習してなかったら同じ100kmでも乗れんわけじゃけえ乗る前につぶれてしまうわけじゃけえ。基本的に無理なんよ。でもそれがハッキリ言えるけえ。楽なよね。基本的にやおい、みんな。競技する人に思えん。意外と負けず嫌いの人が少ない。

EさんとFさんの語りで共通する「楽」という言葉も、Aさんのいう「自由」と同質の類型に区分されるだろう。Eさんは我を通すことが苦手だという自認とともに、多様な主体性を容認してくれる現在の周囲のあり方を肯定的に捉えている。そしてそのなかで自らの実践のあり方に準じられていることから、周囲との活動に積極的な意義を

感じている。

Fさんもまた、自らの状態を推し測ることと、周りに合わせることとの均衡がとりやすい現在のあり方を良しとしている。それをFさんは周囲の性格と結びつけ「やおい」(やわらかい、やさしい)という言葉で表現している。それぞれの考えや状態に則したあり方を認める関係性に意義を見出し、それがFさんの実践のあり方を積極的なものにしていくといえよう。

そうした彼ら／彼女らの関係性について、Cさんは下記のように考えている。

メニューが違うけえ、やり方が違うけえ、押し付けるようになるじゃん、(一緒に)やったら。(そう)いうのはキライじゃし。自分の練習もしたいけえ。やっぱイヤになるじゃん、(お互い)人と合わせてーって。

このような理由から、彼ら／彼女らは各々の志向に沿った個別の練習を活動の基本としている。これはただ自己目的的なだけということではなく、異なる志向を持つ他者への配慮があるといえよう。このことから1人で活動することにおいても、他者との関係性が作用していることがわかる。Cさんの言説は、彼ら／彼女らのあいだで個々それぞれの活動のあり方の尊重が求められていることを示す例であろう。

このような他者への関心や配慮は、ただ個々を隔てた形のみであるわけではない。他者とともにあろうとする意思もまた存在している。Bさんは自身の経験を基軸に、以下のように話す。

やっぱね、自分がショート^{註6)}デビューのときにね、誰もおらんかったのがホンマにすっごい寂しかったけえ、何か、誰かがロングデビューするときとかショートデビューするときは、一緒に出たげたいなと思うんよ。じゃけえそういうのもあって、巻き込んで巻き込まれて出てもいいかなと思うんじゃけどね。

またDさんも、他者と積極的にかかわること、自他相互にとって良好な関係性が築かれているという。

人に会うことで自分が教えてもらったりとかね。人と出会うのはホンマにいいことじゃ思うね。そうやって人に接すると、人もそういうふうに参加するんよ、自然とね。じゃけえ同じように仲間が集まってきたりするよね。(今の周囲の面々は)そうじゃね、ええ感じじゃね。

Bさんは自身が初めて大会に出たときには、周囲の協力がまだ十分に得られていなかったという経験をもとに、これから活動に取り組もうとする他者の動向に積極的にかかわることを是としている。またDさんは他者との出会いを重んじ、他者をよく知ろうとすることによって、現在のような周囲の人々の輪が広がっていったという。これらのことから、彼ら／彼女ら同士の親密性が、ただ個々の都合によってのみ形成される結果としての烏合ではなく、他者への積極的な関心や利他的な意識によるものであるといえよう。

5. まとめおよび今後の課題

(1) 調査結果の概括

以上まで述べてきたことから、まず彼ら／彼女らの親密性は各人のあり方の相違を認め合うことがその基底となっている。彼ら／彼女らが必要以上に実践の場をともにせず、互いの志向に干渉しない由は、このような個々の異質性を尊重し合う関係にある。過度な同調や自己の実践のあり方を犠牲にするような関係上の負担を取り除くことで、彼ら／彼女らは他者とのジレンマを回避していると解釈できる。

彼ら／彼女らのあいだから、集団としての制度や機能が排除または忌避されていることが示された。そこにはチーム活動の行き詰まりや成員としての義務、活動の画一化の危惧する声があった。これらの傾向は、集団の機能が実践のあり方を一義的に規定する要素として、彼ら／彼女らの活動の妨げにしかならないこと、また目的を一にするような同質的な連帯感が、彼ら／彼女らにとって有意な事柄として反映されないことの証左と考えられる。

また1人での練習を優先させることの事由として、それぞれの取り組み方を互いに押し付けたく

ないということが挙げられた。それとともに、他者への力添えが必要となるような状況においては積極的な協力を惜しまないという意見もみられた。このような他者への積極的な関心や配慮を示す語りから、彼ら／彼女ら同士の親密性における利他的意識が示唆された。

活動をともにする契機や相互の関係は多様で、またそれらは恒常性や固定性によるものではない。「楽」や「自由」という言葉は、そうした彼ら／彼女らの関係上の特徴を端的に表現している。一見して自己目的的な彼ら／彼女らの志向の基底には、親密圏における意味ある他者の特性が介在しており、各々に固有な志向のあり方を相互に認め合うことで、そうした他者の存在は自己の実践そのものとともに相乗的に意義深いものとなっていく。

彼ら／彼女らの親密性を相互の差異を前提としたものとして定置するうえで、それが誰しもと遍く築かれるものではないだろう。彼ら／彼女らにとって、各々の実践への志向を妨げるような他者関係は必要ない。それは彼ら／彼女らのいう「気が合う」や「面倒くさい」といった他者関係についての表現などからも明らかなことである。

したがって彼ら／彼女らの親密性は、予め自己の異質性の受容を前提に交流できる者同士が関係を取り結んだものとして措定できよう。このような関係を築くことのできる者同士という認識から、彼ら／彼女らは互いに様々な経験的文脈で語られる「意味ある他者」との交歓に自らの実践の意義を見出し、相互に自己開示しているといえよう。

彼ら／彼女ら同士の親密性において、必要以上に他者との距離が近接することはない。新田は親密圏が想起させる「近しさ」に関して、親密な関係に固有の要素であるとみられる近接性は幻想的外形でしかなく、他者とは決して「わたし」の欲望の鏡や延長ではないとする(新田, 2005, p. 102)。そして親密圏の議論が有機的な統一を幻想する排他的空間の諸相に還元されることへの危惧を示している(新田, 2005, p. 103)。この指摘を調査対象者における自己関係の様態に鑑みると、それは自己の実践のあり方と他者とのそれを同定しないことによる関係の仕方という点において通底するの

ではないだろうか。自他の異質性を自明のものとする事、それが自己開示を可能とし、他者による承認を希求する人々の様相にそぐう親密性を構築するための第一要件なのかもしれない。

(2) 今後の課題

上記のような親密性を形成する機縁の1つとして定置されるのが、X自転車店における「しまなみファンライド」のような実践の場である。特定の文脈について多様な実践への志向を把持した他者同士が共在するようあり方は、ブントと呼ばれる概念の一例として允当するものと考えられる。ブントとは選択的な加入、会員間の目標や経験の一時的な共有、参加者の活動様式や会員間の結びつきの度合いにおける多様性などで特長づけられる集団のことを指す理念型である。NGOや専門化した余暇活動、祝祭や霊性その他種々の事柄をめぐって組織され、世界的な拡がりをもせているとされる（アーリ、2006, p. 250-3）。

調査に協力いただいたX自転車店の店長によると、誰しもが参加可能なこうした実践の場に対する希望者は、昨今特に増加傾向にあるという。実際に今年広島県内で開催されたあるトライアスロン練習会では、各々の所属や競技力を問わず参加が可能であったことなどにより、大会さながらの規模であったという。このような事例からも、多様な個人同士が集う実践の場に対する需要が拡大していることが推考される。

このような個人個人の多様性にもとづいた余暇活動の場の拡大が、相互に承認し合う他者との結節と、それに伴う親密性構築の機会を促すものと目される。ある活動を媒介とした他者との交わりや結びつきの機会を包含した領域は、現代社会において人々の帰属意識やアイデンティティ構築の基盤として機能しているとされる（Hetherington, 1998）。しかし本稿ではそうした領域の構造などについての精緻な分析および描写には至らなかった。この点を今後の課題として挙げ、結びとした。

註

1) バックは現代社会が孕む不確実性について、個人個人の単位でそれらを克服することが求め

られるようになり、医療や教育、政治体制など、様々な社会的制度体の変容が生じると述べている（バック、1988, p. 140）。

- 2) バウマンは近代を「個人化」の時代として定義している。「個人化」が現在行き着いた結果として、バウマンは自己実現の権利と、それを可能か不可能かどちらかにする社会環境管理の能力との落差による矛盾が生じたとしている（バウマン、2001, p. 41-50）。
- 3) トライアスロンとは水泳、自転車、ランニングを1人が連続して行なう競技である。1970年代にアメリカで発祥したとされるこのスポーツは、その後の欧米を中心としたフィットネスブームにともない、急速に愛好者数を拡大していった。日本でも1981年に鳥取県の米子市で初めての大会（皆生大会）が開催され、現在では全国各地で各種合わせて毎年200ほどの大会が催されているという（JTU Web Magazine <http://www.jtu.or.jp/> 2008年1月3日参照）。広島県内でも毎年いくつかの大会が開催されている。なお対象者のなかには自転車競技を中心に活動している愛好者もいるが、トライアスロン競技への参加および練習経験などを豊富に有していることから、本稿ではトライアスロン競技愛好者として一括している。
- 4) 「繋がり」とは、積極的に共有、蓄積された時空間のなかで、当該の相互作用を継続していこうとする意志と、その相互作用の反復を伴う関係性として定義されている（宮内、2005, p. 314-6）。
- 5) これはレイヴ（Lave, J.）とウエンガー（Wenger, E.）による「正統的周辺参加」といわれる方法に該当する。「正統的周辺参加」とは、括約すると、人々の社会的な実践とそれが行なわれる「場所」への参加という見方から、絶えざる相互作用のうちに構成される実践上の理解や経験を捉えることで、研究対象の分析における内外的な二分法を解消しようとする試みということになる（レイヴ・ウエンガー、1993, p.27-8）。特定の文化の外部からある時点より内部へとアクセスし、周辺から徐々に正統的なメンバーシップを獲得するという実践への

参加の仕方、調査者自身が親密圏の一員として内部における場のあり方や身体技法を習得していくことにより、調査対象者との共感、共鳴を感得することにつながるとされる(水野, 2005, p.124).

- 6) 水泳 3, 8km, 自転車 180, 2km, ランニング 42, 2km という競技体系のトライアスロンのことで、1978年にハワイで初めて開催された。現在ではアイアンマンシリーズとして世界各国で開催されている。日本では長崎県の五島市で行なわれている。ハワイはアイアンマン発祥の地として象徴化されている(JTU Web Magazine <http://www.jtu.or.jp/> 2008年1月3日参照).
- 7) 「意味ある他者」(significant others)とは個人を取り巻く人間関係のなかで重要な影響を及ぼす人のことを指す。個人は他者との相互行為を通じて彼が属する集団に適合的な行為の仕方や態度、価値を身につけ、また自分自身を他者の観点から対象化してみるようになるとされる(森岡・塩原・本間, 1993, p. 703).
- 8) トライアスロンは距離に応じてスプリント、ショート、ミドル、ロングなどの競技フォーマットに分かれている(JTU Web Magazine <http://www.jtu.or.jp/> 2008年1月3日参照).

引用・参考文献

- 1) 浅野智彦：親密性の新しい形へ、(富田秀典・藤村正之編、「みんなほっちの世界」, 恒星社厚生閣), 41-57, 1999.
- 2) 浅野智彦：若者の現在、(浅野智彦編、「検証・若者の変貌—失われた10年の後に—」, 勁草書房), 233-60, 2006.
- 3) ジグムント・バウマン(森田典正訳)：リキッド・モダニティ, 大月書店, 2001.
- 4) ジグムント・バウマン(中道寿一訳)：政治の発見, 日本経済評論社, 2002.
- 5) ウルリッヒ・ベック(東廉監訳)：危険社会, 二期出版, 1988.
- 6) ロバート・N・ベラー他(島菌進・中村圭志訳)：心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ, みすず書房, 1991.
- 7) ピーター・バーガー・トーマス・ルックマン(山口節郎訳)：日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法, 新陽社, 1977.
- 8) 土井隆義：「個性」を煽られる子どもたち—親密圏の変容を考える—, 岩波ブックレット, 2005.
- 9) 福重清：若者の友人関係はどうなっているのか、(浅野智彦編、「検証・若者の変貌—失われた10年の後に—」, 勁草書房), 115-50, 2006.
- 10) アンソニー・ギデンズ：(松尾精文・松川昭子訳), 親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム—, 而立書房, 1995.
- 11) アンソニー・ギデンズ(秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳)：モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会, ハーベスト社, 2005.
- 12) 芳賀学：自分らしさのパラドックス, (富田秀典・藤村正之編、「みんなほっちの世界」, 恒星社厚生閣), 19-34, 1999.
- 13) 花崎皋平：身体, 人称世界, 間身体性, (齋藤純一編, 「親密圏のポリティクス」, ナカニシヤ出版), 3-26, 2003.
- 14) Kevin Hetherington: EXPRESSIONS OF IDENTITY: Space, Performance, Politics, SAGE Publications, 1998.
- 15) 檜村愛子：代替生活世界的コミュニケーションの展開—若者たちに見るポストモダンの共同性—, (田邊信太郎・島菌進編, 「つながりの中の癒し—セラピー文化の展開」, 専修大学出版局), 213-49, 2002.
- 16) ジーン・レイブ・エティエンヌ・ウェンガー(佐伯胖訳)：状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加, 産業図書株式会社, 1993.
- 17) 宮島喬・島菌進編：現代日本人の生のゆくえ—つながりと自律, 明石書店, 2003.
- 18) 宮島喬・島菌進編：現代日本人の自律とつながり, (宮島喬・島菌進編, 「現代日本人の生のゆくえ—つながりと自律」: 明石書店), 13-57, 2003.
- 19) 宮内洋：<繋がり>の再編—スティグマ論を起点として—, (好井裕明編, 「繋がりと排除の社会学」, 藤原書店), 305-38, 2005.

- 20) 水野英莉：女性サーファーをめぐる「スポーツ経験とジェンダー」の一考察 —『男性占有』の領域における居場所の確保—, ソシオロジ 154 : 121-38, 2005.
- 21) 森真一：日本はなぜ争いの多い国になったのか—マナー神経症の時代—, 中央公論新社, 2005.
- 22) 森岡清美・塩原勉・本間康平編：新社会学辞典, 有斐閣, 1993.
- 23) 牟田和恵：親密なかかわり (井上俊・船津衛編, 「自己と他者の社会学」, 有斐閣), 138-54, 2005.
- 24) 新田啓子：遠いものを愛すること—親密圏と
その外部, 現代思想 (9) : 92-106, 2005.
- 25) 齋藤純一：公共性, 岩波書店, 2000.
- 26) 齋藤純一：親密圏のポリティクス, ナカニシヤ出版, 2003.
- 27) 齋藤純一：親密圏の安全性と政治, (齋藤純一編, 「親密圏のポリティクス」, ナカニシヤ出版) 211-37, 2003.
- 28) ジョン・アーリ (吉原直樹監訳)：社会を越える社会学—移動・環境・シチズンシップ, 法政大学出版局, 2006.
- 29) 唯物論研究協会編：親密圏のゆくえ—唯物論研究年誌第9号, 青木書店, 2004.

(受付：2007年11月12日)
(受理：2007年12月25日)